

「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018 年版」正誤表

平成 31 年 2 月 15 日に発行しました「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018 年版」に下記の正誤がありましたので掲載します。

(アンダーラインが修正箇所)

2025. 12. 15 訂正

下 巻	頁	位置	誤
	p. 333	上 L2	1) 第 2 種構造要素の検討は、各階各方向について行う。表 <u>19</u> に第 2 種構造要素が…
			正
			1) 第 2 種構造要素の検討は、各階各方向について行う。表 <u>15</u> に第 2 種構造要素が…

2025. 5. 26 訂正

上 巻	頁	位置	追記
	p. 97	上 L2	…(2.6-1)式より求める。 <u>(2.6-1)の上 2 式がいずれも成り立つ場合には、大きい方の値を OBD とすることが出来る。</u> その時…
			誤
	p. 153	下 L9	$Q_i = \left(\sum_{j=i}^n {}_1\beta \cdot {}_1u_j \cdot W_j \right) \cdot S_a = W \cdot {}_1\beta \cdot \left\{ \frac{1}{2}n(n+1) - \frac{1}{2}i(\underline{n}-1) \right\} \cdot S_a$
			正
			$Q_i = \left(\sum_{j=i}^n {}_1\beta \cdot {}_1u_j \cdot W_j \right) \cdot S_a = W \cdot {}_1\beta \cdot \left\{ \frac{1}{2}n(n+1) - \frac{1}{2}i(\underline{i}-1) \right\} \cdot S_a$
			誤
	p. 203	上 L7	<p>iii. 所で壁付き柱のせん断強度 Q_{su1} および Q_{su2} は、シアスパン比 $(M/(Q \cdot d_e))$ の下限値を下記のように設定し (解 3.2-3) 式により算定してよい。</p> $Q_{su1}(Q_{su2}) = \left\{ \frac{0.053p_{te}^{0.23}(\sigma_{BD} + 18)}{M/(Q \cdot d_e) + 0.12} + 0.85\sqrt{p_{we} \cdot \sigma_{wy} + 0.1\sigma_{0e}} \right\} b_e \cdot j_e \quad \text{解(3.2-3)}$ <p>ここで、</p> <p>$p_{te}, \sigma_{BD}, p_{we}, \sigma_{0e}, b_e, j_e$: 解(3.2-3)式で Q_{su1} を算出する場合は建防協 RC 基準の (付 3.8) 式の記号の定義により、また、同じく解(3.2-3)式で Q_{su2} を算出する場合の各記号の定義は第 9 章別表 9.4 の解説付表 2 に記された記号の定義による。</p> <p>$(M/(Q \cdot d_e))$: 所で壁付き柱のシアスパン比で Q_{su1} 算定に際しては 0.6 未満のときは 0.6、2.0 を超えるときは 2.0 とし、Q_{su2} 算定に際しては 0.6 未満のときは 0.6、3.0 を超えるときは 3.0 とする。</p> <p>d_e : 所で壁付き柱の有効せい(mm)</p>
			正
			iii. 所で壁付き柱のせん断強度 Q_{su1} 、 Q_{su2} および Q_{su3} は、建防協 RC 基準 (付 3.7) 式～(付 3.13) 式による。 第 9 章 p.299～300 および別表 9.7 に関係式をまとめたので、参照すると良い。